

## 批評と紹介

松本雅明著

## 春秋戦国における尚書の展開

友枝龍太郎

## 一

さきに詩経「諸篇の成立に関する研究」において中国古典学に新しい分野を開拓した著者が、最も難解な尚書に鋭い分析を加え、その成立過程を詳しく論証したのが本書である。

そしてこれは著者の構想する尚書研究の第一部に属するものであり、春秋後期より戦国後期に至る所謂先秦諸学派の文献に、いかに尚書諸篇の言葉が引用されているかを精密に調査し、その類出の状況を諸学派の歴史意識と關聯せしめて、ここに尚書諸篇の展開の様相を探ろうとしたものである。著者は、韻文である「詩」は、前十世紀から前六世紀までのもので、孔子（前五五—前四七九）以前にすでに本文が確定していたが、散文である「書」は、その原形は前十一世紀末周王朝成立の頃に、その一部分ができたのであろうが、孔子以

後、前三世紀末秦の始皇帝の統一頃までに多く増補され、上は唐虞・夏・殷から、下は秦の興起に至るまでの歴代王朝興亡の史書として完成したとみる。そして本書で取り扱われたのは、孔子以後の増補の部分である。

それでは本書において、尚書諸篇の新古の層は、いかなる方法で分析されたか、ここで著者の取つた立場は、まず先秦諸学派の文献に見える尚書の引文を細かく究明することであり、そしてそれらが虞・夏・商・周のいずれの書に属するかを追究し、先秦諸学派の文献を主軸にして尚書全篇をゆすぶつてみるという方法であつた。陳夢家の「尚書通論」にも先秦引書篇があるが、引用も本書に比してはるかに少なく、各王朝のいずれの書に属するか究明もなく、また諸学派の歴史意識に触れるところもなく、組織的に尚書全篇をゆすぶるまでには至つていなかった。張西堂の「尚書引論」も、今文尚書之考証で、尚書を四つのグループに分けてその成立年代を想定しているが、これは先秦諸学派の文献を媒介にしないために、本文の表現を手がかりとしつつも実証性に乏しい憾みがあつた。この点著者の先秦諸文献の使用が、実証的に尚書全篇をゆすぶつていけるのは、前二者をはるかにしのぐものであり、本書の構成の確かさを物語るものである。陳・張の二書は、いずれも清朝考証学を踏まえ、更に甲骨金文学の成果を吸収して新しい説を立てようとしたものである。した

がつて本書がこの二書をいかにして超えて行つたかを念頭におきながら筆を進めることにする。

## 二

著者は第一篇を「春秋後期の尚書」として、論語を中心に考察する。まず「孔子と尚書」であるが、本論の最も重要な点はこの冒頭の章にあり、その論述も著しく精緻である。著者は論語の引文を細かく検討し、堯問篇中の堯の言葉は後人の附加とし、また泰伯篇末の堯舜禹に対する評言をはずし、孔子の古代観は周公を中心にしたものであつたとみる。尚書論語の流れにおいて曾て樹立された堯舜禹湯文武周公孔子の道が、ここでは周公孔子の道に限定されているのを見出すことができる。周を郁々乎として文なるかなと評し、周公を夢みた孔子は、また著しく実証的であり、夏殷の文献徴するに足らずと歎じているのを参照すれば、周公孔子の道を設定する著者の立場は、論語に徴して誤りはない。

次に論語が全く殷周革命に触れることがなく、孟子においてこれが強調されることに着目した著者は、この後で大誓を取りあげ、古来の説をくまなく顧み、清朝考証学を批判し、陳夢家の説を取捨選択して、儒家本大誓の原形が、孔子と孟子の間に出現したであろうとし、またこの後に牧誓が作られたであろうと推定し、周公中心の書が殷に遡るきつかけを周

書の大誓・牧誓に求めている。ここに論孟の夾撃によつて尚書をゆすぶつて行く著者の態度が見受けられる。そしてこれは春秋末の混乱した社会の救済は周の復興のみによつてはなしたがたく、周を超え歴代王朝の興亡をふりかえる必要を生じ、周の成立を描く必要を生じたからであるとして、当時の歴史意識をその背後に求め、かかる歴史意識が働いて上述の書篇を産み出したとする。ここで周公より文武に遡る途が開けてきたわけである。

第二篇は孟子を中心とする「戦国初期の尚書」である。孟子に見える尚書の引文について、それらの属する書篇を推定すれば、堯典・湯誓・康誥（伏生今文）、大誓（後得今文）、太甲・說命・畢命（八佾命）（百篇序本）、大禹謨・伊訓・武成（鄭注古文）と不明逸文五条になるとし、王朝別にみると、虞・夏・商・周各王朝のものが出揃い、周だけが中心ではないと断ずる。そしてこれは、易姓革命を唱え、周王朝を超えて、堯舜禹湯文武受命の伝統を強調する孟子の歴史意識によるものであるとみ、そこから孟子に近い時期に、周を中心とする書が変貌し、各王朝に互つて主要な書篇が形成され増補されたという結論を下している。たしかに著者も指摘することく、論語と孟子を対比してみた場合、孟子においては、堯・舜・禹殊に舜が強調され、湯王・伊尹・文王武王が前面に押し出され、周公は文王武王に比べて、著しく影が薄くなつて

いる。そして著者はこの点について、

1、一介の農夫であつて天子の位に即いた舜の強調は、何人も舜になり得るといふ孟子の性善説を背負つてゐること。

2、堯舜禹の子が皆不肖で、徳による禪讓が行われ、それが更に夏・殷・周と移行し、ここに易姓革命の思想の根柢があること。

を明示して、孔子が実証的に周の文化政治の確立者である周公を重視したのに、孟子はそうではなかつたと説明する。然らば孔子から孟子に至る間の儒家の世界観・歴史意識の変転はどうして生じたのか。著者がそれを領土国家群の成長という中国社会そのものの変転に相応ずるとみるのは正しい理解のしかたである。論語・孟子をとおして儒家思想の展開を捉え、そこから尚書諸篇の新古の層を分析した著者の視点を狂いはない。かつて内藤湖南博士の尚書稽疑にも、こういう方向づけの着想が簡単に示されてはいたが、まだ十分に実証する段階には到達していなかつた。陳夢家・張西堂にしても、著者に比すれば、その分析視角と実証の点において、なお明確さを欠いていたと言ふことができる。ともあれ著者が尚書の古い書篇と新しく増補された書篇を識別し得た第一歩は、論孟の間における儒家思想の展開を、その鋭い史眼によつて、この上なく明瞭に把握したからである。儒家的に言へば、周公孔子の道が堯舜孔子の道に變つたことであり、思想

史の叙述にも著者の考証が吸収さるべきであらう。

以上の視角を崩すことなく尚書を分析すればどうなつてくるか。著者は孟子に引用された堯典、大禹謨、湯誓・伊訓・太甲・説命、大誓・武成・畢命△罔命√を、戦国初期の増補とし、その成立順序は、まず大誓・武成で、これに続いて湯誓・伊訓・太甲・説命などの商書が現われ更に遡つて堯典・大禹謨の虞・夏書が形成され、また周公より下つて畢命△罔命√の周書が出来たであらうと結論づけている。殊に堯典について、顧頡剛が現本堯典を伏生以後漢の武帝の時のものとし、孟子の見たものと異なると断じたのに対し、現本堯典は孟子の見たものとはほぼ一致すると論証する。勿論著者も言うごとく、孟子の時代、書はまだ定着してないので、伏生までの間にいくらか修改は行われたであらうが、本書の説は疑古派の顧氏の武断を訂するものである。また金縢篇について、これは孟子の引文には見えないが、周書の中の武王を中心とする部分と周公成王を中心とする部分とのつなぎの役を果たすものがこの篇であるとして、その用語例を検討し、陳夢家の西周説を否定し、張西堂の戦国中葉説を引き上げて孟子の前で大誓よりおけるとする。書篇の成立年代の決定はなか／＼困難なことではあるが、この金縢篇が論語の表現を踏まえ、また孟子より古いとされ、更にこの篇の物語的性格を説きあかさたり、その叙述は著しく新鮮である。

第三篇は左伝・国語・墨子の引書を取りあげて、戦国中期の尚書を究明する。左伝・国語・墨子については、それ自体の成立年代が問題であるが、著者は在来の説を詳しく紹介しておおむねの見当をつけ、尚書引文の様相から逆推して、これらの書を戦国中期に置く。この点、本書の立場は、むしろ尚書の側から、左伝・国語・墨子の成立年代に一つの拠点を与えたものであるとすることができよう。

まず左伝の引書について、その篇名を、堯典、大禹謨・皋陶謨・五子之歌・胤征、仲虺・盤庚・洪範、大誓・康誥・無逸・蔡仲之命・罔命・畢命・呂刑・分物・康誥・伯禽と推定し、孟子の時代よりもさらに普遍的に各王朝に分布するとし、孟子との相異は、左伝には夏書が圧倒的に多く、周書の新篇が出現したことであるとす。夏書に関する書篇の大部分は、孟子のあと左伝の前に形成されたと断ずる。そしてこの後に国語の引書を検討し、引文の数は少ないが、虞書が見えなくなつた外は、大体の傾向は一致するとみて、両者に共通な点は、(虞書)・夏書・商書・周書の名称がはつきり出ているところであるとし、ここに史官の学派による書の内容を想定している。また左伝十二公の記事に引かれた書の引文を表面にし、新古混在していることを指摘し、左伝における古代の記述が、思想的に戦国中期の資料を遡り得えないことを明らかにしたのはすぐれた見解である。

ここで著者は呂刑篇の成立に関し、郭沫若を引き、さらに張西堂の東周説を批判し、小島祐馬博士の説に賛意を表し、呂刑が左伝に見えるのでこれを戦国中期の作とする。ついで商書の仲虺篇の成立に及び、王朝対立の表現は論語になく、孟子以後であること、命の思想が墨家を通じた後に可能であること、「乱者取之、亡者侮之」が政治における侵略主義実利主義であることから、左伝墨子の引用と照らし合わせてこれを戦国中期とする。また盤庚篇についても、これが左伝・国語に見えることから、先王・法度・百姓など十二項の表現について考証し、張西堂の西周初年改定説を斥け、陳夢家の戦国時代擬作説を限定して戦国中期擬古の作とする。更にまた洪範篇については、やはり左伝・墨子に見えるので、在来の説においては、津田左右吉・戸田豊三郎両博士の戦国中期説を妥当とし、五行説、五事・八政・五紀等の問題を取りあげ、体系化した儒家思想の尚書への侵入と解し、これを左伝・墨子成立直前のものとするに至つている。

さて墨子の引書について、著者の論証は精細を極める。殊に墨子に不明逸篇の夏書が多く、康誥など周公を中心とする書が見えないので、これは禹を強調する墨家のしわざであると見て、墨家の側に儒家になかつた書が形成されたのではないかとする。また夏書は多く引用されながらも、左伝・国語

の夏書と篇名が異なっているので、史官派の書とも異なると見ているようである。更に墨子各篇の引書の状況を分類した表は、これによつてかえつて墨子の書の成立状況を逆推し得る重要な資料であり、墨子の成立を究明する一つの手がかりを与えたことになる。とにかくこの篇において、孟子以後の尚書の展開の様相を探つてその増補の部分を明らかにし、ここに左・国の史官本と墨子の墨家本を想定したのは、著者の功績である。

最後に第四篇は、礼記・荀子・呂氏春秋・韓非子などの引書を取り扱い、「戦国後期の尚書」と題する。礼記については、坊記・表記・緇衣を第一類とし、第二類を文王世子・学記・大学とし、ここに尚書の篇名が記されているところに着目し、第一類より君奭・君陳・君雅が周書の後に附加されらうと推定し、また第二類の大学にのみ見える秦誓を焚書以前のものであると推定する。かくしてこの後で費誓を焚書とし、陳夢家の西周説、張西堂の春秋時代説に對し、その叙述様式用語例よりして、荀子や秦誓に近い戦国後期の作とする。ここで周書の末篇と秦誓費誓が解決されたことになる。そして著者は、この背後に尚書の魯学派儒家本を想定している。

荀子の引書については、篇名を記すもの三条、書十二条、伝目一条で、虞・夏書はなく、商書は二篇でその重点は周書

にあると見る。また書曰の引用が多い点に着目し、荀子が書の整理を行なつたのではないか、それは儒家の側の齊本を整理したのであらうとする。そして十六条中の十二条までが今文であるから伏生今文は荀子本に近いと推定している。この点齊に遊んで三たひ祭酒となつた荀子の事歴、また天人を分離して著しく合理的であつたことなどと思ひ合わせると、齊本尚書の整理、虞・夏書の切捨てが行われたらうという推定も、前人未発の論であるとはいへ、傾聴に値する著者の卓見である。そしてこれは荀子における詩の尊重と併行する。

かくして韓非子・戦国策・管子の引文に法家本尚書を探ぐり、法家は古にかえることなく、法家的な新篇を作成して行つたとし、また呂氏春秋は雑家的色彩が強く、引書も荀子と異なり、商書は墨家本で、伏生今文は法家と同様に少ないとする。そして戦国後期に儒家系の二本と墨家本・法家本との相異がはつきりしてきたと論断している。

著者が戦国後期に、(1)礼記系統の儒家の魯本、(2)荀子系統の儒家の齊本、(3)左伝・国語系統の史官本、(4)墨子の墨家本、(5)韓非子等の法家本といった五学派の尚書のテキストがあつたこと、および漢初伏生の今文尚書が荀子の整理した齊本を本とし、孔安国の古文尚書が魯本を本としたこと、を想定したのはすぐれた見解である。細部については人によつて意見の相違も生じてくるところがあるが、この想定に至る

引文考証の精緻さは驚歎に値すべく、博にして精なる著者の学風を示すものである。

### 三

以上の論証のために、著者があらゆる時代の尚書研究の諸説をくまなく取り入れ、殊に清朝考証学より近時甲骨金文学の研究成果を活用批判していることは、末尾の索引に明瞭である。また先秦諸学派の文献を主軸にして尚書全篇をふるいかけ、体系的に尚書諸篇の新古の層を分析したことは、まさしく学の名に値するものであり、はるかに前人の域を越ゆるものである。更に先秦諸学派の歴史意識を探つてこれを尚書の展開に結合するあたり、ここに我々は本書の構成の確かさとその叙述の論理性を見出すことができる。歴史意識は人間思想の一面であり、中国の古代思想史もまた本書を顧みるところがなくてはならぬであらう。古典の理解のしかたを積古と疑古の二つに分けるとすれば、著者はちやうどその中間に立つており、いわば中道を得たものである。

著者は本書において、難攻不落な尚書を先秦諸学派の連合軍によつて攻撃した。攻撃に参加した諸部隊は、論・孟・左・國・墨・礼・荀・韓・呂などであり、外濠を埋め、三の丸二の丸を陥落させ、本丸に迫りつつある。著者は第二部において、周書の最も古い書篇の成立過程を論証し、更に第三

部において、尚書と詩経の関係を論ずる予定であるが、完成の日の一日も速かならんことを切望する次第である。本書において語りて詳らかならざるところは第二部本丸奪取の暁に自らにして明らかにされるであらう。

(昭和四一、二、風間書房、A5 七〇七頁)

劉世儒 著

### 魏晉南北朝量詞研究

坂井健一

現代漢語において、「人、物あるいは動作は、いずれも數量で計算することができる。人や物の數量の單位を表わす語を名詞に伴なう助數詞といい、動作の回数を表わす語を動詞に伴なう助數詞という。大多數の名詞には、それぞれ習慣上きまつた助數詞がある。例えば、「本」はきまつて「書」につく助數詞である。「個」はもつともよく用いられる助數詞で、応用範囲がきわめて広く、人を指すばあいにも用いられるし、きまつた助數詞をもたない物の分量をいい表わすときにも用いることができる。ときには、ある種の名詞のきまつた助數詞の代りに用いることができる。」「漢語では、名詞に